

## 主の奉献

2014.2.2

### ルカ 2・22-40

今日2月2日は教会の古くからの伝統に従って、主の奉献の祝日として祝われてきました。救い主イエス・キリストの誕生を祝うクリスマスの祝いから四十日目の2月2日を、教会は今日のルカ福音書の記述に基づいて、主の奉献の祝日として祝って来たのです。今年は2月2日が日曜日にあたっているので、今日の主日のミサは特別に主の奉献を祝う喜びの中でささげられます。今日の福音を味わうとき、主の奉献の祝日には独特の喜びが満ちあふれていることが分かります。毎年2月2日祝われる主の奉献の祝日の喜びは、言ってみれば、厳しい寒さのなか立春を迎え、春の兆しを感じ取ることが出来た人の喜びのようです。

今日の福音に語られている主の奉献の祝日の喜びにまず最初に包まれているのは、マリアさまとヨセフさまです。生後四十日目を迎えたイエスさまを胸に抱かれたマリアさまと付き添うヨセフさまは初々しい喜びに包まれて、エルサレムの神殿に向かったことでしょう。今日私たちが味わう主の奉献の祝日の喜びは、マリアさまとヨセフさまが味あわれたにちがない、お生まれになられたイエスさまの初めてのお宮参りの喜びです。そこでマリアさまは、律法に定められた慣習に従って産後の清めの式を受け、これも律法に定められているとおりに、はじめて生まれた男の子を神さまにおささげし、定められたいけにえをささげて、あらためて、神さまのものとされたその子を神さまの御手から授けていただいたのです。この日ヨセフさまとマリアさまは、神さまの御前で、またユダヤの人々の中で、晴れてイエスさまの両親となられた喜びを噛み締められたにちがありません。主の奉献の祝日を祝う今日のミサの中で私たちも、マリアさまとヨセフさまの心を満たしていた喜びを味あわせていただきたいと思えます。

このミサの中で、私たちは奉納のパンとぶどう酒をささげ、このミサの中に響くイエスのみことばと聖霊の働きによってイエスご自身の体とされた御聖体を天からのパン、いのちの糧として私たちのうちにいただきます。マリアさまとヨセフさまの心を満たした喜びに包まれて、わたしたちも今日の祝日のミサに与らせていただきましょう。

マリアさまとヨセフさまを包んでいた喜びに最初に与らせていただいたのは、今日の福音に登場するシメオンとアンナです。聖霊によって、聖母マリアのう

ちに最愛の御子を宿らせた神は、その聖霊によって年老いたシメオンに神が遣わされるメシアに会うまでは死なないとの約束を与えられ、彼を導いて今日聖母の胸に抱かれた幼子イエスと出会わせてくださったのです。シメオンを包んだ喜びは、今日の祝日を祝う私たちの喜びでもあります。私たちも聖霊による神の導きによって教会に導かれ、聖母マリアと出会い、その胸に抱かれた神の御子イエスと出会わせていただいたのです。

シメオンは幼子イエスを腕に抱き、神をほめたたえて歌います。「主よ、今こそあなたは、おことばどおりこのしもべを安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです」。シメオンがこのとき目にしているのは、自分の腕の中に抱きとられた赤子です。その子は他のすべての赤子のように、無心にシメオンの顔を見つめているだけです。それにもかかわらずシメオンは「わたしはこの目であなたの救いを見た」と言っています。シメオンのこのことばは、旧約のモーセの姿を思い起こさせます。出エジプトの四十年に及ぶ旅の幾多の困難を経て、モーセはネボの山の頂に立ち、約束の地の果てから果てまで見ることを許され、自分の使命は果たされたことを悟って、その生涯を終えたのです。今日の福音のシメオンは、そのモーセのように、幼子イエスを腕に抱き、その子によってもたらされる、神の大いなる救いの約束の実現を望み見ているのです。このとき果てしなく広がるシメオンの視界には、彼の腕に抱かれたイエスの十字架の死と復活の彼方に広がる神の救いの世界が広がっていたのです。「これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」旧約のイスラエルの民の歴史を担うユダヤの民の中にお生まれになった神の子イエスの十字架の死と復活によって開かれる神の救いの約束は、今日の福音の場面を越えて、万民に向かって広がっているのです。今日の福音のシメオンの目は、幾千年もの時代を超えて、イエス・キリストがもたらされた救いを信じる私たちをもその視界のうちに捉えているのです。シメオンが神をほめたたえて歌った賛歌は、神の救いを信じる私たちのうちのこだまし、私たちの歌ともなっているのです。

シメオンとともに今日の福音に登場するアンナも旧約聖書のルツ記に語られている一人の女性、ナオミの姿を思い起こさせます。ナオミは、飢饉に見舞われた故郷の地を離れて、愛する夫と二人の息子とともにモアブの地に向かいます。その異郷の地で相次いで夫と二人の息子に先立たれ、自分のもとに留まった嫁のルツに付き添われて故郷のベツレヘムに戻って行きます。彼女は迎えてくれた顔馴染みの故郷の人々に言います。「今となっては、わたしをナオミと呼ばずにマラと呼んでください。全能者である神がわたしを酷い目に遭わせたの

です」。ナオミという名前は快いという意味でマラとは苦いという意味であるとナオミが言いたかったことが解説されています。そのような失意のナオミに神はルツを通して家を継ぐ子供を授けてくださり、その血筋からやがてダビデ王が生まれることを語ってルツ記は締めくくられています。

七年間ともに暮らした夫と死に別れて、八十四歳になるまで、神殿を離れることなく断食して祈りながら昼も夜も主に仕えていた、今日の福音のアンナはそのような生活の中でついに、幼子イエスを自分の腕に抱き上げる喜びに満たされたのです。ルツ記に語られているナオミの喜びは、こうして今日の福音のアンナの喜びとなり、私たちは聖書に語られているこの二人の女性の喜びの場に立ち会っているのです。今日主の奉献の祝日に今日の福音を通して私たちが信じている救い主イエス・キリストが私たちの中にもたらしてくださっている喜びに包まれたと思います。このミサの中で私たちが味わう喜びは、立春の寒さの中でほころび始めた春の兆しのようなものかもしれません。周囲の寒さが身に伝える日々の中で、幼子イエスを囲んでその幼子イエスに見入ったマリアさまとヨセフさま、シメオンとアンナを包み込んでいる春の兆しのような喜びを、私たちの信仰のうちに見出す恵みを願いあいたいと思います。そのような想いに結ばれて、主の奉献の祝日のミサをともにしたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高